



未来づくりは、教育から始まる。

2024 年度報告書

NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター

NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター
〒399-1801 長野県下伊那郡泰阜村 6342-2
TEL:0260-25-2851/E-mail:info@greenwood.or.jp
www.greenwood.or.jp

2024 年度報告書
発行責任・編集者：齋藤 新
発行年月日：2025 年 7 月 1 日

ごあいさつ



代表理事
齋藤 新

昨年、前代表の辻英之が衆議院議員に当選したことを受け、新たにグリーンウッドの代表となりました。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

さて暮らしの学校いだらぼっちは2025年で40年目。今でも変わらず田んぼで米を育て、山から薪を出し、粘土や木で食器を作るなど、「自分たちの手と足と知恵」を使った暮らしを実践しています。

しかし世界に目を向けると、社会は大きく変化しています。ウクライナとロシアの戦争やイスラエルとパレスチナの問題が続き、各国が自国主義を強める中、気候変動による自然災害も頻発するなど、課題は課題を餌にますます大きく膨らんでいます。このような先行きの見えない時代に、果たして子どもたちに必要な力は何なのか改めて考えなければなりません。

社会がどんなに変わっても、必要なのは自分の頭で考え、他者と協働して新たな答えを導き出す力ではないでしょうか。その力を身につけるためには身体を使い、失敗を重ね、何度も繰り返す実体験が必要です。今やゆったりとした時間の中で存分に体験することは贅沢なものになりつつあります。しかし、子どもたちにとってなくてはならないライフラインなのです。

40年を迎えた今、私たちはこの取り組みをさらに広げ、様々なステークホルダーと協力していくことが求められています。重要なのはこの活動がただのこどもの体験に留まらず、未来を創っているものだと思え続けることです。いつも応援してくださる皆様と一緒に社会に表現して参ります。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

Contents

ご挨拶（代表理事）・目次	1
団体 VISION・MISSION	2
2024年度事業報告	
参加者総数	3
特集	5
こども対象事業	
暮らしの学校いだらぼっち	7
信州こども山賊キャンプ	9
泰阜村教育活動	11
青年対象事業	13
学び普及事業	15
その他の取り組み	16
「衆議院議員 辻氏	
× 代表 齋藤」対談	17
2024年度寄付報告	19
2024年度会計報告	20
2024年度事業一覧	21
2025年度事業計画	22
2025年度にむけてスタッフより	23
新聞掲載記事	25

VISION

【私たちが実現したい社会】

みんなが「できる」を持ち寄る社会

MISSION

【グリーンウッドが担う役割】

人と自然が混じりあう暮らしから、人の“ねっこ”を育てる

現代社会は「誰かとつながること」が難しく、希薄になったつながりは社会課題を複雑にしています。しかしながら、人は1人では生きられないことを里山の自然は教えてくれます。人と自然が混じりあう暮らしの中で、こどもも大人も、ふぞろいな個性を発揮しながら他者と関わる。それぞれが「できる」ことを少しずつ持ち寄って、目の前の小さな世界を変えていく。そんな時間の積み重ねが人として大切な「ねっこ」を育み、やがて大きな社会課題を乗り越え、豊かな未来をつくと私たちは信じています。

VALUE

【グリーンウッドが大切にしている5つの価値】

- 1 こどももおとなも安心して自分を表現できる場作り
- 2 違いを受け入れ、混じりあい、分かり合うことをあきらめない
- 3 答えを急がず、まわり道やでこぼこ道を楽しむ
- 4 自然と共に暮らし、思う存分遊ぶ
- 5 泰阜村に根差し、地域と共に未来をつくる

○ こども / 全国

- ・暮らしの学校 だいらぼっち
- ・信州こども山賊キャンプ
- ・森のようちえん まめぼっち

○ 青年（高校生・大学生）

- ・長期インターン
- ・短期インターン
- ・信州こども山賊キャンプボランティア
- ・大学ゼミ合宿受け入れ
- ・大学授業・ゲストスピーク
- ・その他 ワークショップなど

○ こども / 泰阜村

- ・やすおか探検隊 あんじゃねっこ
（泰阜保育園年長児）
- ・あんじゃね学校（泰阜小児童）
- ・放課後児童クラブ いってきました
（泰阜小児童）

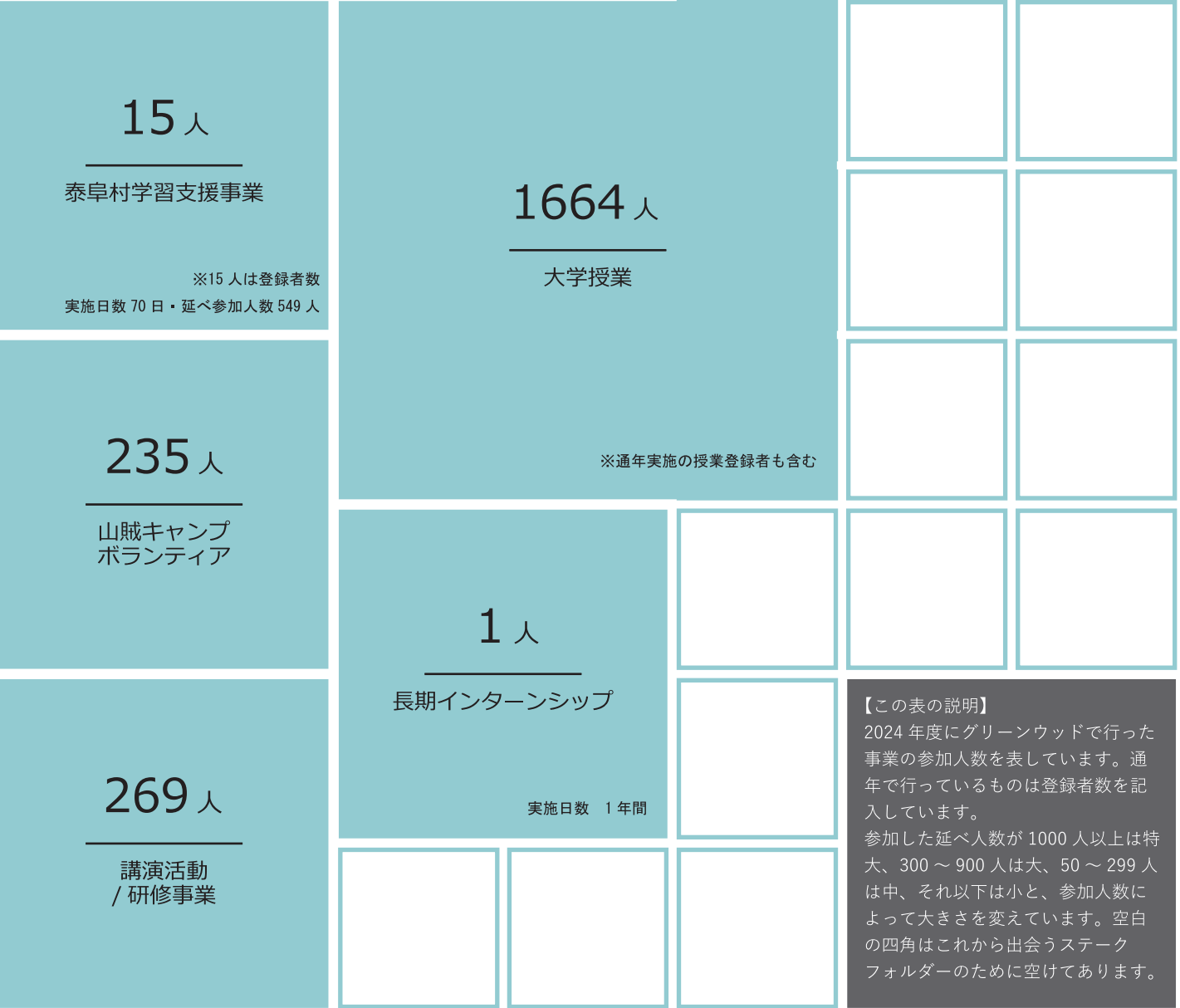
- ・学習支援事業（泰阜中学生）
- ・やすおか暮らしを楽しむ会てまひま
（村民）

○ 普及（他地域・他団体）

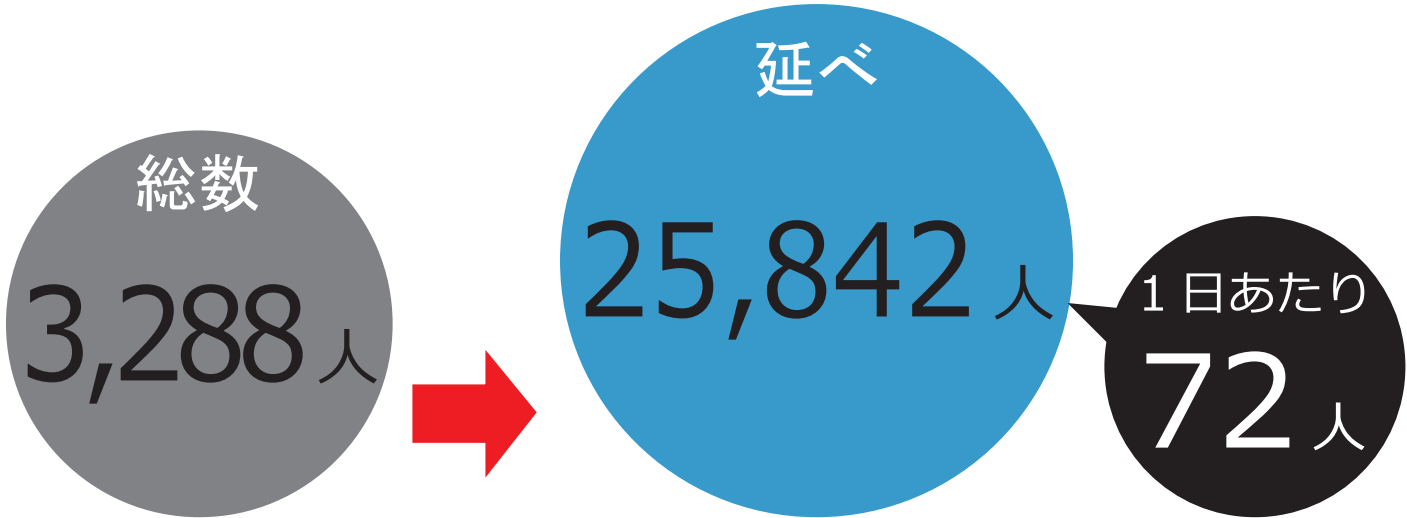
- ・グリーンウッド施設・事業見学コース
- ・ノウハウ研修
- ・各種講演

○ 新たなチャレンジ

- ・児童養護施設児童向けキャンプ
- ・若者支援 NPO との協働
- ・企業との連携 他



【この表の説明】
2024 年度にグリーンウッドで行った事業の参加人数を表しています。通年で行っているものは登録者数を記入しています。
参加した延べ人数が 1000 人以上は特大、300 ～ 900 人は大、50 ～ 299 人は中、それ以下は小と、参加人数によって大きさを変えています。空白の四角はこれから出会うステークホルダーのために空けてあります。



2024 年度の事業参加人数は、各事業ごとに特徴的な変動が見られました。地域対象事業「あんじゃね学校」では、昨年度の「ツリーハウスプロジェクト」実施時と比べ、参加者は減少したものの、今年度は放課後児童クラブ事業に注力したことで、全校生徒の約 8 割の登録につながり安定した参加者数の伸びが見られました。またこどもたち発信による宿泊企画を 3 回実施するなど派生した企画も増えています。

夏の「こども山賊キャンプ」では、台風接近により 4 コースで日程変更を行ったためキャンセルが相次ぎました。自然災害に加え、交通機関の運休判断が早まるなど、運営上の課題がより顕在化しています。

青年対象事業では大学授業の専任科目減少に伴い参加者数が大きく減少しました。一方で、若者支援 NPO「サンカクシャ」との連携によって新たな関係性が生まれました。今後力を入れていきたい青年層へのアプローチの可能性が広がっています。今後は、災害リスクに対応した多角的な事業展開とともに、参加者との継続的な関わりや、多様な学びの場の創出が求められています。

【特集】新たな道しるべ VISION をつくる | 組織強化

目まぐるしく社会は変化しています。時代と共に事業も増え、ステークホルダーも広がっていきました。混迷を極める時代だからこそ、グリーンウッドが事業を通してどんな未来を思い描き、そのためにどのように動いていくのかを考え、新たな VISION 『みんなが「できる」を持ち寄る社会』に改定しました。創設から40年を目前に控え、グリーンウッドも変化していきます。



自立のための VISION と MISSION

「暮らしの学校いだらぼっち」創設からスタートしたグリーンウッドも 2025 年で 40 年目を迎えます。

団体としても経済的な自立を目指そうとその時々々の社会課題やスタッフの想いを体現しながら様々な事業を立ち上げてきました。しかしそれは失敗と悩みの歴史でもあります。それぞれの想いで事業を企画しても、結果的に参加者が集まらなかったり、単に収入だけを目的とする事業アイデアも出たりと、それぞれの価値観や考え方も違うため迷走することがしばしばありました。それは「団体が何のために存



在するのか」が明確ではないから起きる問題なのです。

そこで 10 数年前に全員が進むべき道を示す地図となる VISION と MISSION を考えました。それが「あんじゃねえ社会をつくる（※あんじゃねえとは泰阜村周辺の方言で大丈夫だの意味。そこから『誰もが安心できる社会』と捉えています）」と「ひとねる（立派に育つの意味。泰阜村の自律的教育観と捉えて事業化）」です。おかげでスタッフの力を向けるベクトルが揃ってきたことで事業の方向性が定まり、教育を軸とした戦略で一定の成果を得て今に至ります。

社会と連携するための VISION へ

しかしこの言葉は方言を元にしているため、内部での道しるべにはなったものの外の人に説明する際はとても苦労しました。なにより時代は流れ、社会課題も変化しています。内部のスタッフに留まらず、より多くの人に理解と協力を得られる言葉を作ろうと、新たな VISION と MISSION を変えることになりました。

しかし大切にしているもののイメージはあっても、臆気なものを言葉にするのは考えている以上に難しいものです。さらに今回の大目的は「外部の人たちに伝わる言葉」です。そのため徹底的に磨きあげなければなりません。

そこで今回はプロの力をお借りすることにしました。ライター宮

本恵理子さんです。宮本さんは日経ウーマンの記者から現在はフリーのライターとして様々な本のブックライティングで活躍されている方で、スタッフばるの大学時代の友人という縁でお願いしました。

プロの力を借りて

宮本さんファシリテーションのもと 5 月、10 月にそれぞれ 2 日間のワークショップを実施しました。「聞きほぐし・問いほぐし」という宮本さん独自のワークで、グリーンウッドのこれまでやこれから、スタッフの想いや考えていることを徹底的にお互いに話し、聞き、言葉を紡いでいきます。

普通の会社と比べると、圧倒的にコミュニケーションの量が多い職場ですが、それでも「深い話」や「そもそもどう考えている？」という話は日常的にすることはなかなかできません。「わたしたちの仕事はどこに向かっているのか？」を考える時間となり、未来に向けて様々な話が出ていました。スタッフからは「この時間だけでもやった甲斐があった」という声もありました。



2 回目の最終日。いよいよここまで話してきた言葉から VISION、MISSION、VALUE の形に宮本さんがまとめてくれました。使い慣れた言葉でも選び方や少しの言い回しで大きく意味や印象が変わります。私たちでは導き出せない言葉は新鮮な刺激にあふれ、なるほどと驚くばかりでした。

その言葉を受け取り、ここからワークチームで、共感、納得、ズレ、違和感を確認しながら、最終形を創り上げました。それが VISION 『みんなが「できる」を持ち寄る社会』、と MISSION 『人と自然が混じりあう暮らしから人の“ねっこ”を育てる』です。

自らを乗り越える作業

宮本さんから提案された“できる”という言葉に、当初スタッフからは反対の声が多数ありました。「できる人でないと社会に関われない印象がある」「できるはできないことへの否定に聞こえる」。チームでも何度も話し合う中で、「誰でもできることはある。できることを評価されてしまうから、社会や他者への関わりが薄く、自信を無くしている。人と自然が混じりあう暮らしは自分でも知らなかった意外な“できる”を発見して自信につながったり、自分にはできないことを誰かに助けてもらいその多様性の豊かさに気づける。なにより様々な事業の中でこどもたちは自分の“できる”ことを発見し、自らの成長に感動する。事業を進める意味でもこの言葉を軸にしていくべきではないか」という意見からこの言葉に決まりました。

それぞれの得意を集める

これまでは HP やパンフレットの作成もなにもかも団体内部で進めてきました。その過程で育つスキルもありますが、一方で今回宮本さんをお願いして感じたのは、得意な方に任せた方が得られるものが大きいということです。それは私たち自身の得意で他の方を助けられれば、その方がより豊かな社会に近づくのではないかという気づきでもあります。

自分たちだけでなんとかする。から、多様な人と関わって新しい視点を入れて世界を広げる。これこそまさに「みんなができるを持ち寄る社会」であり、これまで続けてきたことを体現した言葉だと感じます。

「できる」を持ち寄る社会を体現する

6 月の終わりに若者 14 名が 1 泊 2 日のキャンプにやってきました。東京の NPO 法人サンカクシャに関わる、DV やネグレクトなどにより居場所を失い親や身近な人に頼れない青年です。「大人版山賊キャンプ」と称して、薪を割って風呂を焚き、食事も自分たちで作ります。今回は泰阜村のアマゴを囲炉裏で焼いて食べることに。夜はナイトハイクをして、翌日は川遊びをして帰りました。

スタッフの方からは「普段見られない積極的な姿や、川に飛び込み全身ずぶぬれになって遊ぶ様子に驚かされた」「限られたものしかない環境の中で、互いに協力し創意工夫をする経験は若者たちにとって替え難いもの」と話されていました。わたしたちにとっては当たり前の日常の提供です。しかしその体験が誰かの心に灯をともしのだと改めて感じました。



グリーンウッドの事業の参加者は、ここ最近の格差の広がりから、こどもの教育に積極的な家庭のこどもが増えている印象があります。教育を通じた社会づくりを標榜しながらも、さらに体験格差を生み出す状況にジレンマを感じていました。一方でここ数年は児童養護施設のこどもキャンプも実施するなど、今回のように私たちが 40 年間培ってきたスキルや経験を求めている方も増えてきています。

「みんなができるを持ち寄る社会」実現のために、私たち自身もコミットしていく指標となり、さらに豊かな場が作られる期待を生む言葉だと確信しています。

ブログ記事



自分たちからできることに会おう | 暮らしの学校だいらぼっち

こども対象事業

2024 年度のだいらぼっちに集まったのは小学生 9 人と中学生 8 人の 17 人。新規参加者 10 人のうち、7 人が男子ということもあり賑やかな反面、衝突も多く、まとまる気配が見えないスタート。それでも暮らしの中で起こる出来事に対して全員で考えることを繰り返し、ひとりひとりが自分に「できる」ことを見つけていきました。



人のことばかりが気になる毎日

お互いの人となりを知らないはじめの頃は言葉も行動も自分と違う仲間のことが受け入れられず、人のことばかりが気になり、もめごとが続く日々でした。毎日の話し合いの時間には告げ口のような発言が飛び交いました。「誰かがこんなことをしてた」という声には「お前だって!」と応じるばかりで自分のことを振り返る余裕はありません。謝れば済むような小さな間違いでさえ「みんなに責められるのがこわい」と話し合いの場に出てこれなくなる子もいました。自分が持っている話し合いでの一票をどう使ったらいいのかわからないこどもがほとんどでした。

一方、その状況に苛立ちややるせなさが募り、頭を悩ませていたのは前向きに暮らしをつくりたいと考えているこどもたちでした。「言葉がきついのが気になる」「聞いているだけでつらい」と戸惑いながらも思いを言葉にしはじめる姿がありました。まだ拙くても、その声は少なからず周りのこどもたちに影響を与えていきました。

田んぼも畑も薪もぜんぶ自分の暮らし

春には薪、畑、田んぼの作業が次々にはじまりました。「効率を考えるなら、ローテーションでまわす方が良いのでは」という案も出ましたが、2 年目のこどもから「まだみんなの体力が分からないし、全

員と一緒に作業する時間を大事にしたい」という声がありました。そこから自然と全員で取り組むことが日常になっていきました。

ここ数年、係のこどもが作業の段取りをとり、それを他の子に伝えるという流れが主でしたが、係以外のこどもたちは作業をどこか他人事のように感じてしまう様子もありました。

そこで今年度は段取りから全員で考えることにしました。「何のために作業をするのか」という前提から、作業の手順や役割分担に至るまで、話し合って決めていきました。係だけで話せばもちろん素早く効率的に決められます。ただ、この遠回りとも思える時間の中で、自分の頭で考える、人の考えを聞く、全員でひとつの答えを選択する、ということを繰り返します。その繰り返しが「自分もこの場をつくっている 1 人だ」という意識をこどもたちの中に育んでいきました。こうして段取りから作業までみんなで関わるのが当たり前になると、誰もが今の状況をおおかた把握しているようになりました。田んぼも薪も畑も、ひとりひとりの「自分の暮らし」として根付いていったのです。



村の人とこどもたち、実は支え合っている

秋には毎年恒例のお風呂やストーブ用の薪を集める「山出し」がありました。今年はお世話になっている村の方の土地であり、地域の人々が大切にしている阿弥陀様を囲む森での作業でした。こどもたちは伐倒されたヒノキやマツにロープをかけて引いたり、手で運んだりしてトラックの荷台いっぱい薪を積みこみました。

翌日、その阿弥陀様に地区の行事として村の方々とお参りに行く機会がありました。村の方々から「だいらぼっちのみなさんのおかげで森が明るくなって嬉しいよ」「綺麗にしてくれてありがとう」とこどもたちに直接声をかけていただきました。これまで続けてきた薪の暮らしが、泰阜村の里山と確かに繋がっていると実感できる瞬間でした。普段はお野菜をいただいたり、村の方の手にある技を教えてもらったりと、村の方から与えていただくことがほとんどでした。いつも支えてくれている人たちに喜んでもらったことがこどもたちのひとつ自信となりました。



自分たちが選ぴとったからできること

暮らしのあらゆる場面でこどもたちはそれぞれの興味を広げていきました。草木染めでは定番の素材にとどまらず収穫後の畑のナスの茎やご近所の方が草刈りに困っていたセイタカアワダチソウなど、暮らしの中にある染物の可能性を探りました。壊れた斧の柄がびったりとはまるように地道な修理に打ち込む姿もあれば、朝の限られた時間の中で見た目にも楽しいお子様ランチづくりを極める子もいました。興味の広がり方や力を注ぐ対象は人それぞれです。失敗してはやり直し、何度も試行錯誤する過程で「自分にはこんなことができる」という手応え少しずつ積み重ねていきました。自分で考えて動いたからこそ、その子の中にその子だけの実感が生まれたのです。

「だいらぼっち祭り」では家族や卒業生に向けて屋台を出しました。はじめは焼きそばやたこ焼きなどの案が出ましたが、「感謝を伝える」という原点に立ち返り「自分たちからできること」を考え直しました。当日は畑で育てたさつまいもで焼き芋や数種類の葉をブレンドしたお茶などを振舞い、来た人に喜んでもらうことができました。



また例年は「引き継ぎ会」（入学式と卒業式のような会）で着る藍染 T シャツをつくるため、市販の藍染液を買っていました。しかし今年は草木染めを日々やってきた経験から草木染めをすることに決めました。森でそよごを採り、染物の工程をやり遂げ、当日はそよごで染めた T シャツや手ぬぐいを身にまとい臨みました。

時に立ち止まり、時に悩みながらも、こどもたちは暮らしの中で少しずつ「声を出せば、この場は動き出す」という感覚を掴み、やがて自分の力で自分がある場を変えていけるという手応えが芽生え、相手を信頼して本音で向き合う姿が見られるようになっていきました。誰かがつくる場に身を委ねるのではなく、自分たちで考え、自分たちで動かしていく暮らし。1 年の積み重ねが、ひとりひとりの自信を育てたのだと思います。



ブログ記事



◎ 2024 年度参加者

	キャンプネーム	学年	年目	出身
1	のは	小4	1	岐阜県各務原市
2	なっちゃん	小4	1	岐阜県山県市
3	モク	小4	1	東京都杉並区
4	だいき	小5	1	東京都練馬区
5	オオダコ	小5	2	愛媛県松山市
6	ゆい	小5	2	神奈川県川崎市
7	竹輪丸	小5	2	東京都杉並区
8	ヤタ	小6	1	愛知県西尾市
9	こうだい	小6	2	愛知県豊川市
10	あつき	中1	1	埼玉県春日部市
11	ただっち	中1	1	愛媛県松山市
12	キャンプ	中1	1	千葉県流山市
13	ねん	中1	2	神奈川県横浜市
14	かりん	中1	2	神奈川県横浜市
15	仲っちゃん	中1	3	神奈川県川崎市
16	いろ	中2	1	愛知県名古屋
17	ゆう	中2	1	神奈川県横浜市

関連ブログ記事

[▶ だいらぼっち卒業生インタビュー](#)

体験を通して育む自分らしく生きる力 | 信州こども山賊キャンプ

山賊キャンプは自然の中で人と暮らす体験が中心です。初めて出会った者同士でぶつかり合っていたこどもたちも、自然と人との関わりの中で五感を通じた発見を重ね、だんだんと互いを認め合い、ありのままの自分を受け入れるようになりました。3泊から9泊の短いキャンプ生活ですが、確かにこどもたちの本当の強さを育んでいます。



酷暑の夏、自然と共に生きる知恵を学ぶ

南信州泰阜村でも、気温 35℃を超える日が続き、キャンプ生活では常に熱中症のリスクと隣り合わせでした。「100 杯飲もうぜ! 山賊茶」のかけ声で楽しく水分補給を促し、毎日欠かさず味噌汁を飲むなど、体調管理には細心の注意を払いました。一方、エアコンがない不便な環境の中での暑さ対策は、自然のありがたさを再認識することにも繋がりました。木陰で休んだ時の風の心地よさ、川底が見えるほどきれいな川で遊ぶ爽快感、自然に身を委ねることで、自然の癒しの力を実感し、自然と共に生きる知恵を身体を通して学ぶ夏でした。「早く川で遊びたいね!」というかけ声が、準備や片付けの意欲に繋がっていたのも印象的でした。

自然と仲間が教えてくれたこと

キャンプ中はこどもたちの「発見」が何よりも輝いていました。「この石を動かしたら、カニが出てきたんだよ!」「こう組んだら火が点いた!」など、誰かに教えられたことではなく、実際に体験して、自分の五感を通して得た発見が、何よりも確かな学びとなることを改めて実感しました。一方で、こどもたちの人との関わりの中で気になる場面もありました。

火おこしをしても、インターネットの情報から「俺の知っている方

法の方が正しい」と主張し合ったり、「自分が通う学校の方が学力が高い」など相手よりも優位に立とうする関わり方です。時にケンカにつながり孤立したりとトラブルに発展することもしばしば見られました。強さや正解を盾にしないと自分自身の存在が崩れてしまうと思っているような危うさを感じました。

キャンプ中は、「違う人がいるのは当たり前。互いを認め合いながら暮らそう」「強く見せようとしなくていいんだよ」「困ったら周りに頼ろう」という言葉を何度も伝えました。そんなこどもたちも、自然の中で仲間と全身を使って遊びながら、周りの言葉を受け入れ、だんだんと表情が和らいでいきました。自然と仲間の存在が「ありのままの自分で良い」と受け入れてくれている様子でした。

現代社会は、こどもたちが体験を通じて学ぶ機会が減少していますが、自然の中で仲間と過ごしながら、体感し、他者と関わる中で得られた気づきは、自然と人と共に自分らしく生きる本当の強さを育むと改めて実感しました。



保護者へキャンプの裏側を伝える

夏キャンプ終了後は「想い出会」を開催しています。こどもたち、保護者の方、相談員（ボランティア）、そしてスタッフが集まり、ビデオや写真を見ながらキャンプの思い出をふりかえる会です。今年度は東京に約 300 名、名古屋に約 90 名の方が参加してくださいました。

ここ数年は農家さんからのビデオメッセージをプログラムに組み込んでいます。山賊キャンプで食べる野菜の9割は泰阜村産であり、キャンプのこどもたちも口をそろえて「野菜が美味しかった!」と話しますが、地元の農家さんの協力があってこそ新鮮で美味しい野菜を届けられています。今年度はナスを作ってくださいという宮島さんからビデオメッセージをいただきました。合計 300 本のナスをキャンプへ納品してくださったこと、安心な野菜を届けるための土づくりと肥料へのこだわり、野菜本来の力を引き出し丈夫な木にすること、今年は雨の日が少なく苦労したこと、お家でも残さず食べてほしいこと…。日常にも繋がる大切なことを語ってくださいました。保護者の方からは「ボランティアや地域の方など、こんなに沢山の方がキャンプを支えてくださっているんですね」と感想をいただきました。普段は見えにくい、キャンプの裏側を伝えることで、多くの方の支えの中でこどもたちの体験の場が成り立っていることを改めて感じていただけました。



ブログ記事



児童養護施設のこども対象 山賊キャンプ

未来を切り拓く力を、すべての子どもたちに

千葉県の子児童養護施設一宮学園との 3 回目のキャンプを、8 月に 2 泊 3 日で開催しました。9 名の小中学生と 4 名の職員が参加し、川遊び、沢登り、工作、ドラム缶風呂など自然を満喫しました。「時間がもったいないから初日から肝試しがしたい!」というこどもの声から即席の肝試しを企画し、大いに盛り上がりしました。

参加したこどもたちの感想文では「初めてのキャンプだったけど楽しかった。また肝試しをしたい」「みんなでたくさん笑い楽しい時間だった」とキャンプでの楽しかった思い出が語られていました。

一緒に参加した職員さんは「3 回連続で参加の子が、今回は周りを支える側に回りたいという言葉があり、自分のことだけでなくみんなで気持ちのよい場をつくることに意識が向くようになったのは大きな変化でした」と語りました。こうした経験が、自信を育み、未来に向けて力強く歩み出す礎となることを願っています。



ブログ記事



幼児から中学生～各世代にひろがる | 泰阜村教育活動

泰阜村での教育活動は、幼児の自然体験、小学生の放課後児童クラブ、中学生の学習支援と、世代を越えて展開。自ら考え、学び、行動する力を育むことで、こどもたちの「できる」が広がり、地域に根ざした成長の循環を生み出しています。

放課後児童クラブに行ってきました



毎日の「やってみたい」が生む夢の時間

登録児童数が過去最多の 53 名となり、1 日あたり平均 26 名が利用しました。日々の活動の中で、こどもたちの表情や行動には小さな変化が見られ、それが確かな成長の兆しとなって表れていました。

こどもたちは 4 月から年齢や性別を問わず、様々な創作に取り組む姿がありました。木工ではスプーンや箸などのカトラリー作りや武器づくりに熱中していました。おやつ作りにも積極的で、地域の方からいただいたサツマイモを使って、焼きいもから大学いも、チップスづくりにまで発展。「これ揚げたらおいしいんじゃない？」という一言から始まり、調理の楽しさと食べる喜びを味わいました。また、手芸や編み物も人気で、布の端切れからバッグを作ったり、手編みの帽子に挑戦する姿も見られました。高学年の子たちが、それぞれにやりたいことを実現していく姿を目のあたりにする中で、低学年のこどもたちも新しいチャレンジに積極的になっていく姿がありました。

私たちがしたいキャンプはどんなもの？

日々のチャレンジの中で特に盛り上がりを見せたのが、キャンプ企画です。春には「秘密基地で寝たい」という想いから、約 4 メートルの青竹で骨組みを作り、ブルーシートを壁にしてティピーを自作。秋は標高 750 メートルの大峰山でのキャンプ。「山の上で寝てみたい！」という一言からスタートし、全ての荷物を背負っての登山に挑戦し、山頂での宿泊を成し遂げました。3 月には 6 年生の「もう一度やりたい」という強い希望から旧学有林にあるツリーハウスをフィールドに、キャンプの実施が決定。念願のツリーハウス泊を実現し、これまでで最多の 3 回の実施となりました。

引き継がれる「つくる力」

キャンプ企画は、場所選びやメニュー決め、持ち物リストの作成から当日の進行まで、すべてをこどもたちが行いました。一方で、これまで活動をリードしてきた 6 年生の卒業を受け、「またやりたいけど来年はどうしよう。」という不安の声もありました。それでも、最後のキャンプで 6 年生から「いつものいつてきましたと一緒にいいんだよ。みんながやりたいことを実現してね。」という言葉に「自分たちがやりたいことを声に出して行けばいいのかな。チームをつくって話し始めよう！」と交わされた会話に、自ら生み出していく意識が次世代へ確実に受け継がれていることを実感しました。

ブログ記事



泰阜村保育園年長児対象外遊び

こどもを解放させたいなら先生の解放から

泰阜保育園の年長児と泰阜村の自然を舞台に遊ぶ活動が「あんじゃねっこ」です。今年度は先生方を対象に研修会も行いました。自然保育に高いハードルを感じている先生方が多くいます。研修では、実際に森に行き、「いろいろな制限が無いたら、自分がこどもだったら何がしたいか」を考えてもらいました。次にそれは実現可能なのか否か、可能でないなら何が原因なのか、どうすればできるのかを考えてもらいました。できないと思っていた遊びも、研修が終わるころには、考え方や工夫次第でできると考えられるようになりました。先生方の心と頭を柔らかくすることで、こどもたちの遊びの幅も広がるのです。また、普段意見交換の時間を持つことが難しい先生方ですが、この機会にお互いの考えていることを共有できて保育者同士の相互理解につながりました。

ブログ記事



泰阜中学校学習支援事業

気象予報士の特別授業実施

15 名の中学生が登録し、授業の復習や宿題のサポートを中心にしながら、新たに辞書や参考書の整備を実施。定期テストに向けた過去問題集も作成しました。さらに、学校と連携しながら、生徒自身が学習計画を立てる取り組みにも挑戦し、主体的な学びの姿勢を育んできました。

特別企画として、こどもたちが企画・運営の中心を担う形で、気象予報士の方をお招きし講演会を実施。「天気予報が外れたときはどうなるのか」といった素朴ながら本質的な質問には、人々の生活やときに命に直結する可能性があることを伝えていただきました。また、「今の勉強が将来どのように役立つのか」といった中学生ならではの疑問にも丁寧に答えていただき、「自分の未来を描くこと」という言葉にこどもたちは真剣なまなざしで耳を傾けていました。

ブログ記事



やすおか暮らしを楽しむ会てまひま

「泰阜村で暮らせてうれしい！」体験を提供

事業開始から 9 年目を迎えた今年度は、恒例となった 12 月のおせち料理づくりとおもちつき、1 月のみそづくりを行いました。お正月を「お年とり」という泰阜村独自の文化があります。60 代～ 80 代の先輩お母さんから、若い親子や移住間もない新米村民、地元の小学生へと「お年取り料理」を継承していただきました。「予定をこじ開けて参加した」という小学生も含め、総勢 51 名の賑やかな場となりました。みそづくりは村外からの参加もあり、参加者層の広がりも感じます。

こどもたちが外で遊んでいる合間のお茶の時間では「みなさんとおしゃべりできるこの時間がすごく好きなんです」と言われたり、移住間もない方が新たなつながりができたりと貴重な時間となりました。体験だけではなく、「てまひま」の価値が高まってきています。

ブログ記事



青年たちの支えとなる体験の場 | 青年対象事業

青年たちは、「この場にはあたたかい人が沢山いる」と言葉を残してくれます。しかし、私たちは優しく甘やかすように関わっているわけではありません。彼らの主体性を信じること、共に協力すること、そんな人との関わり方が新鮮なのかもしれません。今後も、ここでの出会いを支えに社会で活躍する青年を精一杯送り出します。

山賊キャンプボランティア

青年たちが子どもたちから学ぶこと

夏に195名、冬に40名の相談員（ボランティア）が参加してくれました。キャンプ中は毎晩、相談員ミーティングを行っています「こどもは意外と何でもできる」と語る相談員が多くいました。例えば火おこしに失敗しても工夫してやってみる。みんなの前で話せない子に周りが配慮している。前の日にできなくても次の日は少しできるようになっているなど、こどもの可能性を信じ、よく見て変化を捉えていました。また、相談員の中には「学校で上手くいってなかったけど、こどもたちの姿をみて、何でも楽しめば何とかなりそうと思った」と話してくれた人もいました。自然の中で身体を動かし、こどもたちと同じ目線で悩み、楽しむからこそ、相談員も土台となる学びを持ち帰っています。そんな相互に育ち合う場が山賊キャンプにはあると実感しています。

ブログ記事



相談員スキルアップ

リピーター相談員のチームワークを発揮

恒例となった「山賊Tシャツ作り」「薪作業・味噌づくり合宿」を相談員と協働で開催しました。合宿では何度も参加している相談員もいるため、話し合う場面をたくさん作り、薪作業でも「どんな薪小屋を目指すか？」から話し合います。「安全のために崩れないように積む」「こどもたちが取りに行きたくなくなるように美しく積む」「工作にも使うから、色んな形が混ざっていると良い」など、多様な意見が出ます。一番近くでこどもと関わっているからこそ、こどもの行動を想像した意見が出ることに驚きました。作業中もお互いに遠慮をせず、自分勝手でもない、目標達成のために必要な声が飛び交う雰囲気がありました。主体的で対話的な場づくりの積み重ねが、強くなやかなチームワークを生み出すことを実感しています。

ブログ記事



大学実習受け入れ

仲間と共に暮らし働き「学ぶ」を考える3日間

「学ぶとはなにか」をテーマにした2泊3日の合宿を、先生を志望する岐阜聖徳学園大学の学生7名に提供しました。

今回は、他事業でこどもたちの遊び場となる、あんじゃねの森の下草刈りを行いました。自分たちで決めたところまで終わらないかもしれないという場面でも、ゴールを見失わず、協力、集中して取り組む姿が印象的でした。最終日は作業を通して得たものを材料に「学ぶ」を考えるワークショップを行い、白熱した議論の場が生まれていました。

「実際に体験することの大切さに気づいた」「人の話を聞いて、自分の意見を伝えることが必要」「挑戦する楽しさや、失敗の良さ、考えることの大切さを学んだ」などの感想がありました。人として先生として、大切な気づきを一人ひとりの言葉で持ち帰ってくれたように感じます。

ブログ記事



短期インターンシップ

「正解のない暮らし」が教えてくれること

今年度は10名の方が短期インターンシップに参加しました。延べ参加日数は134日。「こどもたちが自分の意見を言っている姿を見て、自分自身を見つめなおす機会になった」「自分で考えるということを実践の中で実践できた」など、正解のない暮らしを通して自ら考える経験が、多くの学びをもたらしてくれました。

特に印象的だったのは、今年度初めての受け入れを行った高校生たちが語っていた「間違ってもいい」「違う意見を言うことは悪いことではない」という言葉です。社会に出れば正解も不正解もないからこそ自ら考え、人と意見を交わしながら協働することが大事になります。正解のないことがこの世の中にたくさんあることを知り、自分で考え、自分の足で歩く楽しさに気づききっかけになったと感じます。



ブログ記事



長期インターンシップ（1年間）

2024年度参加者 のいびー（高砂葉音）

共に本気で楽しむ

暮らしや作業、イベントも全てこどもたちと話し合って決めていくのだらばうちでは、私自身もその一員となって本気で悩み、考え、働くことが不可欠でした。こどもたちの学びを邪魔しないようにと初めの頃は一步引いてしまっていた私でしたが、一緒になって本気になることでこどもたちの本気も加速していくことに気づかされていきました。楽しみも苦しみも共にしながら、困りごとを一つのチャレンジとして向き合っていく中で、教え、教わる教育ではなく、共に作り上げる、学びあう教育の本質に気づけた気がしました。

暮らしという学び場

暮らしと学びがかけ離れ始めている今、こどもたちの生活の中にある思いや願いが主体性を生み、暮らしの中にもこそ多様な学びがあることを改めて実感できた一年間でした。自然に囲まれた暮らしの中で草木染めをして色を出したり、自然の恵みをいただいたり、うまく回らない作業から解決方法を考えたり、大変なご飯作りを楽しみに変えたり。実は学びは常に身の回りにあるのだと感じます。日々の暮らしの中にある「なぜ？」という疑問に目を向け、挑戦する大

切さに気付かされました。

自分の言葉で勝負する

ゼロから自分たちで作り出す一年間を支えるのは、だいたらぼっちの話し合いだと私は感じました。こどもも大人も関係なく、それぞれが自分の言葉で自分の思いを伝え合うことで、一人一人が尊重され、目指したい暮らしに近づいていきます。自分の意見を主張することが苦手だった私ですが、相談員の方々の豊かな言葉に囲まれ、本気で子どもたちと向き合う姿を見てきたことで、少しずつ自分の言葉で勝負できるようになっていきました。言葉にして伝え合うことが、仲間になる一歩だと気づかされた一年でした。

葛藤しながら挑戦し続けたこの一年は、何にも代えがたい私の土台となり、今後の人生で何度も立ち返る原点になったと感じています。これから教育現場を目指すうえで、ここで学ばせていただいた仲間としての在り方、自分としてのこどもたちの向き合い方を土台に、挑戦し続けていきたいと思います。支えてくださったグリーンウッドの皆さん、一緒に過ごした仲間たち、保護者の方々、本当にありがとうございました。



ブログ記事



培った学びを社会化するノウハウ提供 | 学び普及事業

教育が国を支えるといわれるように、今社会に山積する様々な課題のねっこ、解決の糸口には教育があると思われま

す。今年度は見学や研修、講演を通じて、山村における自然体験教育の意義を伝えることで、日本社会の様々な課題解決に一石を投じることができるのではないかと改めて感じています。今後もネットワークを広げ積極的に発信していきます。

「地域×教育」が社会づくりのキーワード

今年度も全国から多数の方が来訪されました。ここ数年感じるのは、活動のスタートは環境保全や地域活性化等それぞれ違うのですが、継続的に活動する内にやはり関わる人を育てることが大切という結論に至り、見学に来られる方が多いことです。

農と暮らしをテーマに棚田の再生に取り組む岡山の環境保全団体は、今後持続的に活動をするためには、教育や子どもに関わることが必要だと感じ来訪されました。見学で得た視点を活かし、早速親子向けの自然体験プログラムを実施していくとのこと！「地域 × 教育」を土台に、これからも来訪される皆様へ伝えていきます。



足元の信州から自然体験教育を推進

長野県は 10 年前より自然保育を積極的に推進しており、グリーンウッドでは 2016 年から自然保育研修に毎年講師を派遣しています。徐々に自然保育が浸透してきているものの、現場の園からは安全管理に不安があったり、保育者の経験値も様々な中、常に考え方やスキルをアップデートしたいという声を聞きます。研修が非常に学びになったとのこととで研修のリピートも増え、県内の自然保育の向上に貢献しています。

またもう一つ特筆すべきは、グリーンウッドが行っている自然体験型の学童を参考にしたいという声や、近郊地域から複数あることです。近隣の村の教育関係者が見学に来訪し、今実際に運営されているこどもの居場所の質を深めていく上で大変参考になったとのこと。

さらには長野県の山村留学推進事業にも携わるなど、まさに地域の

こどもたちの自然体験教育を深め広める役割を担っています。

多彩なネットワークから参画者を増やす

今年度は過去に山賊キャンプに参加されていた方やいだらぼっちの卒業生の保護者等から直接依頼を受け、こどもに関わる方向けの研修や、保育園の保護者向けの講演を実施しました。数年に渡りグリーンウッドの事業に参加されていた方々は、グリーンウッドの活動に価値を見出してくださっており、根底にある教育観は同じだろうと思います。過去に事業に参加された方々が、今度は人を育てる場をつくる「同志」として仕事の依頼をくださった嬉しい事例でした。今後も「みんなが『できる』を持ち寄る社会」の実現のため、様々な場面において理念を伝えて理解を得て、参画してもらえる幅を広げていきます。



生み出した成果が次の世界を創り出す

いだらぼっちが創設されて 39 年が経ちました。前代表辻が国会議員になり代表交代するなど、団体として大きな節目の年となりました。生み出してきたつながりが新たな関わりを生み、それぞれが豊かな社会をつくり続けています。

社会に目を向けると不安定な状況が加速する国際情勢や、円安・物価高などの生活を直撃する変化。さらに気候変動も進み自然災害も大きくなっています。グリーンウッドが育ててきた「人」がこれからますます必要とされる時代になってきます。



国会議員になろうとおもったきっかけ

齋藤 だいち（辻の愛称）がいつの間にか国会議員になってしまったと思っている方もいるので、今回の対談がひとつの区切りとしてこれまでグリーンウッドでお世話になった方たちに向けたメッセージになればと考えております。早速ですが、議員になって6ヶ月経ちました。今の気持ちをお話してください。

辻 180度全く違う世界に来了たので慣れないことが多い。まず土がないし、季節はあんまり感じられない。やっぱり30年も当たり前のように自然に囲まれていたので戸惑いを感じているのがひとつ。もう1つはプレーヤーとして社会をどう変えていかやってきたが、今は目の前にいた子どもたちや村の方たちがよりよく暮らすための制度をどう考えるかという働き方になってとにかく慣れないことが多いです。

齋藤 改めて議員になろうと思った経緯や理由を教えてください。

辻 姉が4、5年前に亡くなって、さらに兄が3年半前に事故で亡くなった。兄弟がいなくなり、これまで全く考えてなかった親の面倒とか家の相続が一気に押し寄せてきました。特に兄の場合は現職の県議会議員だったので、家の片付けだけでなく政治活動をどうやってフェードアウトしていくのか、兄が政治家としてどうしたかったのかのメッセージを受け取れないままいろいろな始末をつけるのはちょっと苦しかったね。一方で自分が福井に生まれて育ったということを意識せざるを得ない時間だった。お袋の面倒とちょうど青森大学で教授になって東京に拠点を構えることが重なって、福井に帰る回数も増えていきました。そのタイミングで実は兄の後釜にどうかという話があって。その時は100パーセントありませんと即決で断りました。「吊いだから勝てる」という話をされても果たして兄が喜ぶのかなとか。やりたいことがあって政治家になるならいいんだけど、やるからやっちゃえみたいなのは合わないなと思って明確に断りました。

議員になった理由は2つあるんだけど、裏金の事件を見てさすがにこれはないだろうと思ったのが1つです。庶民が一生懸命頑張って税金を収めてやってるのにごまかして嘘ついて懐に入れちゃう。こんなことがあっていいのかという強い憤りを感じました。

もうひとつは能登の地震です。寝たきりのお袋と元旦を一緒に過ごしていたら福井もめちゃくちゃ揺れて、もう1回来たらつぶれるなど危険を感じました。その時考えたのは、次に来たらどうやって立てないお袋を避難させるのかということ。避難所の中学校に連れて行ったとして、電気水道が止まるかもしれない中で下の世話もしなきゃいけないし、食事介助もあるし、ベッドもどうするのかとか、避難所でも邪魔者扱いされるなどか。ハッと気づいたのはやっぱりそういう社会なんだなと。要介護者や障がい者とか緊急事態に一番救わなきゃならない人たちが避難を諦めてしまう。本当に弱い立場の人たちが一番割を食らう冷たい社会なんだと当事者として感じました。これはやっぱり変えなきゃならないと



強く感じました。その1週間後ぐらいに福井県の党の方から見透かしたかのように「国政に出ないか」と連絡がありました。その時は考えさせてくださいと返答しちゃっている自分がいました。そこから半年悩んで決断しました。

齋藤 ある意味導かれるようにというか、もう帰結するのはそこしかなかったみたいな感じですね。

泰阜村での経験が議員の自分を支えている

齋藤 泰阜村で31年過ごしてきて得たものと、議員になって役立っていることをお聞きしたいです。

辻 たぶん全国会中で一番過疎地から出てきている議員です。選挙区は小浜だけど、31年暮らしたのは泰阜村だから。過疎地で暮らした経験もそうだけど、小さな村の自立、こどもの教育、自然の脅威など当事者として得てきた感覚を持っているのは尊いことだなと思っています。人口1500人の実態や、過疎地とは何かなってわかっている議員はほとんどいない。既にそういう意味で国会内で存在感は感じてはいます。

政策的にしわ寄せが来るのが僻地や子どもといった弱い立場の人たちで、その苦しさとか乗り越えた人たちを目の当たりにしてきたり、一緒にやってきたりする経験は求めればすぐ手に入るものではない。グリーンウッドの理念そのものですけども、手間ひまかけて、丁寧にものごと作ったり、自然と向き合ったり、その中から得る喜びを実感として持つてくる経験は尊い。だいだらぼっちがやっている一人一票でみんなで決めていく話し合いはまさにそう。国会でも自民党が少数で党だから今は丁寧に議論を重ねる姿勢があって、私はめちゃくちゃ感動しているんだけど、そう思っているのは自分だけかもしれない。ほとんどの人は話し合いの経験なんてないから、ヘタすると「早く多数決で決めればいい」とみんな考えている。やっぱりだいだらぼっちの暮らしや村の様々な立場や考え方が違う人と関わる村の独特の営みが今役立っています。

当事者意識を持つ人を育てる

齋藤 今はグリーンウッドも値上げをせざるを得ません。教育に興味を持ち、ある程度所得に余裕のある人達しかキャンプに参加できないという流れが生まれています。また都市部は5割ぐらいの子どもたちが私立の中学校に受験するという状況です。教育も体験も格差が広がる正と負の両方のスパイラルが生まれて、さらに再生産される社会になっています。国の教育はどうあるべきですか。

辻 公共有はやっぱり大事なんだと思う。高校無償化も決まって、一部は評価できるけれど確実に格差を広げる一因になり、公教育が廃れていく引き金を引いてしまったと思う。学習指導要領改定に向けて議論すると、すぐに詰め込み型はどうかとかIT化の話になってしまう。そこに多様性や直接体験といった我々がやってきたような活動が取り入れられる必要があるけれど、国会では社会教育なんてほとんど語られない。そもそも学校の教育ですら優先順位が低い。

齋藤 私たちが行っている事業は誰もが共感してくれるんですけどね。



先ほどの話の中で、土を触ったことがない、僻地を知らない、そういった体験が全くない人たちが国政に出てくるということでした。ますます我々のやってきた体験の必要性を理解することは難しくなっていくのではないのでしょうか。そこに私はすごく不安を感じます。

辻 正直思うのは与党の皆さんは偉そう。苦しい生活をしたことがない。被災者や地方の人に言葉だけで寄り添うと言うけど当事者になってないです。遠くから語ってと思う。土に触れたことがない、田んぼを作ったことがない人に、今の農家や米作りの苦しみが分からないのと同じで、過疎地の窮状や弱者の苦悩も体験がないと咀嚼できない。勉強して学べるものではない。

だから地方のことが分かる野党議員を増やす必要があると訴えている。増えれば委員会などで質問をして政策を変えさせられる。地方出身でも与党議員はどうしても都市部中心の考え方になってしまう。当事者意識を持ちつつ、きちんと政策に対して批判的、建設的に質問できる議員を増やした方がいいなと思っています。

政治を身近に感じる若者を育てるために必要なこと

齋藤 若者の政治に対する意識格差も感じます。本来は暮らしの先にある同じ地平にあるはずの政治が分断されてしまっている。社会課題をわかりやすく矮小化してみんなで叩くという状況も見られています。若者たちがもっと政治に興味を持つ、あるいは参画する意識を育てるために、立教大学や青森大学でも教鞭を取っていた経験からどのように考えていますか。

辻 一般市民から遠いのは「胡散くさい政治」であって、そういった政治家がごまんといふから遠い存在にさせてしまっている。本来政治のど真ん中に若者はいる。人が2、3人集まったら社会のルールができるように、その3人が面白く生きていけるようなルールを決めて皆で守る。うまくいかなかったら変えるということをする。まさにだいだらぼっちがやっていることで、政治がどうのこうのという手前で自分達できちんと考えて、参画して、物事を決めたり、変えたり、あるいは何か運動を起こすといった経験を丁寧にやっていくことが政治に参加する若者を増やすことなんだと思うのね。だから大学では大人数でも参加型の授業をやっていた。

教え子がよく議員会館に来るのだけれど、秘書に国会を案内してもらったり、なるべく勉強会や政策の会合も見学させてもらったりしている。小さな委員会の会合では議員はみんな案外真面目なんだよ。官僚に立ち向かわなければならないから相当勉強しないと議論できない。それを見て学生も感動して帰っていく。国会議員が少し自分たち側に来るわけだ。扱われてるテーマも極めて自分たちの身近なことを扱っているから。自分と政治を直結するパイプができれば、若者たちは案外覚醒するのではないかなと思う。

一方で土台となる、「自分たちで考えて行動する」というようなことを、しっかりと学ぶ機会を失ったらダメになってしまう。多数決で全て決めるとか、競争社会が強まると少数や弱者を排除する世界になってしまう。



政治に興味を持つことと同時に体験から学ぶ。両方繋いでいかないといけない。今の社会はどちらも遠いね。自分の興味関心だけの若者も多い。人と関わった方が面白いんだということを伝えていかなければいけない。

山村の未来とグリーンウッドの役割

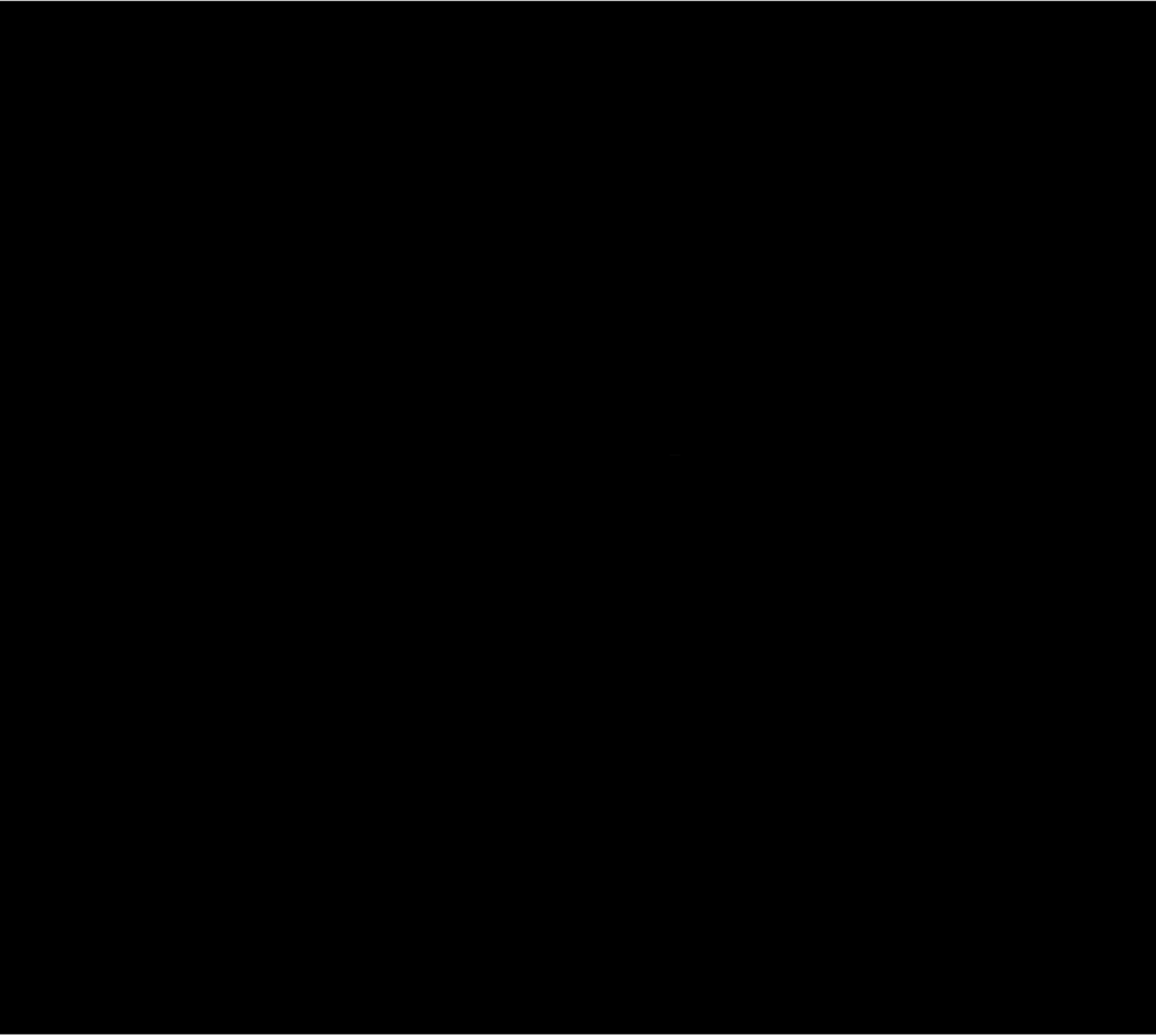
齋藤 私も政治は遠い存在だと泰阜村に来るまでは思っていました。それが村長選があったり、村議会議員選挙のお手伝いを頼まれたりや村民の代表を決めるという場に立ち会ったことは大きな考え方の転換につながったと思います。

最近、土地をお借りして畑を始めました。野菜を作ることもそうですが、自分自身が動くことで目の前が変化するという実感はグリーンウッドや泰阜村で学んだなと思ってます。山村はそういう意味でも非常に重要です。しかし700自治体が2040年にはなくなると言われ、労働人口もどんどん減り都市に集中されていく。これから山村の未来は決して明るくありません。一方で山村がなくなれば日本も立ち行かないと思います。

辻 森、水、農地を失うと、日本は潰れると思う。例えばコンパクトシティ化して人の流れを1つに集約することはできるとしても、森の機能や水をどう維持するのかとか、自然防災の意味での森林や田んぼもどうやって守るのか、という考えを抜きに人だけ集めても難しい。こどもの教育も同じで山村や自然、地域が持っている教育の力を抜きにして、都市の論理で効率的な教育をやればいいとなると、僕がこの国会で今まさに感じている、そこでしか学べなかった体験とかってというのが消えて行くことにつながってしまう。これは日本にとって損失だろうなと思っている。グリーンウッドは離れてみるとやはりきわめて特殊な事例だとわかる。若者が10数人働いていることや山村を使ったこどもたちの教育活動、それらが与える地域への波及効果や地方創生のあり方は一言では説明できない。日本の可能性を高める一事例として、地道に続けて行ってもらいたいということと、社会に広く一般化させるようにがんばってもらいたいです。

齋藤 最後に今まで応援してくださった皆さんに一言お願いします。

辻 泰阜村とグリーンウッドで経験して育てられてきた時間というもの、今の土台になっていると確信しています。この土台がなければ迫力のない言葉になってしまう。30年間本当に苦しかったけれど、諦めずに現場を支えてくれた、あるいは一緒に作ってくれた人たちには感謝してもしきれないなと感じます。ステージが変わった以上は、今度は地方が面白くなることと、泰阜村でやってきたような教育がもっと展開されて若者が生き生きとする社会に向けてがんばっていきます。福井県からの出馬ですが長野県の議員でもあるつもりです。今度は支えてもらった恩返しというよりも支える側に行くんだなと思ってます。これからも応援をお願いします。

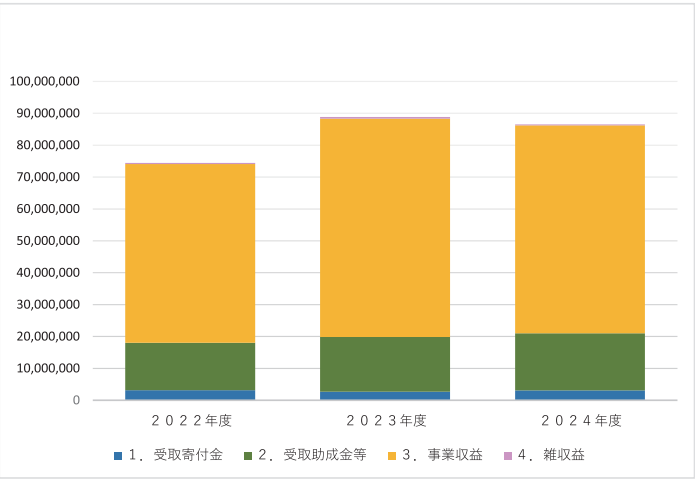


2024 年度寄付金総額

総額 2,718,432 円 (152 件)

※こちらに記載している寄付金の額と決算にある寄付金の額は、クラウドファンディングで集めた寄付金と振込手数料などを差し引いている関係上一致しません。

【経常収益推移（2022-2024）】

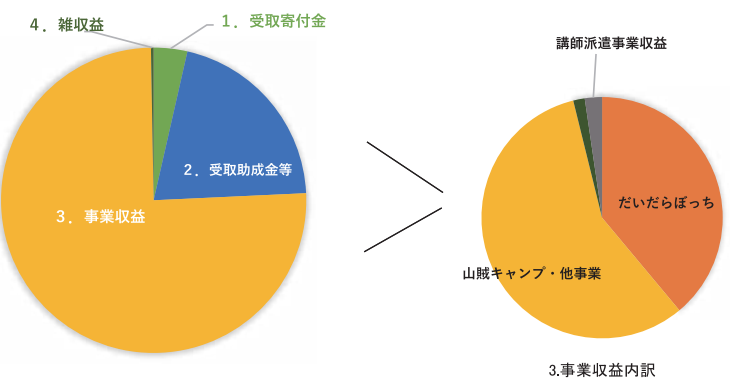


収入の柱となる事業が安定的に実施され、山村留学生の保護者の来訪、視察見学、インターン、大学生受け入れなど往来が増え少額ではありますが収入につながっています。また寄付金も昨年度から人数、額とも増加し、様々な方に事業の意義を理解いただいていることを感じております。

一方で山賊キャンプは台風により1日程の東京方面参加者のみ短縮されるなどのイレギュラー開催となったり、参加者の直前の体調不良によるキャンセルなどもあったり、実施期間内での増減が恒常的に出てきており、それが年間収入の減にも繋がっています。

物価高もあり出費もかさむと予想されましたが、様々な物資的支援や集団生活による経費削減もあって収入減でも決算は黒字で終わられています。

【経常収益内訳（2024）】



コロナ前まで多くの収入を山賊キャンプに依存していました。現在はコース数を減らして多様な事業で支える方向にシフトしています。児童養護施設のこどもキャンプに加え、都市部の若者支援を行っているNPO法人サンカクシャと協働した事業を行うなど新たな対象に向けた活動も増えつつあります。

最低賃金の上昇や物価高など支出も増えてきているため、各事業の値上げを行わざるを得ない状況が続いています。教育を通じた社会づくりを進めながらも参加者が限定されてしまうという悩ましい状況です。今後はグリーンウッドで培ったノウハウが他地域の保育園や学校、教育現場で活かされるといった、社会化していくことがポイントになってきます。これまで以上に視察見学や講演活動を増やすことに重点を置いて活動していきます。

1. 2024年度活動計算書

科目		(単位：円)
Ⅰ 経常収益		
1. 受取寄付金		3,077,380
2. 受取助成金等		17,904,414
3. 事業収益		65,264,836
4. 雑収益		244,411
経常収益 計		86,491,041
Ⅱ 経常費用		
1. 事業費	人件費	43,203,324
	その他経費	20,653,421
	事業費計	63,856,745
2. 管理費	人件費	6,725,897
	その他経費	14,438,477
	管理費計	21,164,374
経常費用計		85,021,119
当期正味財産増減額		1,469,922
前期繰越正味財産額		47,313,786
次期繰越正味財産額		48,783,708

2024年度受取助成金等内訳 (単位：円)

科目	(単位：円)
長期自然学校事業	6,000,000
学童保育・学習支援事業	10,743,414
民間助成金（積水ハウス）	500,000
経常収益 計	17,243,414

2024年度事業収益内訳 (単位：円)

科目	(単位：円)
長期事業収益	25,402,380
短期事業収益	36,061,600
講師派遣事業収益	1,505,582
応答助言事業収益	16,500
地域自然学校事業収益	107,500
指導者養成事業収益	413,600
情報受発信事業収益	40,000
普及開発事業収益	589,874
諸団体交流事業	398,100
施設管理運営事業収益	729,700
経常収益 計	65,264,836

2. 2023年度貸借対照表

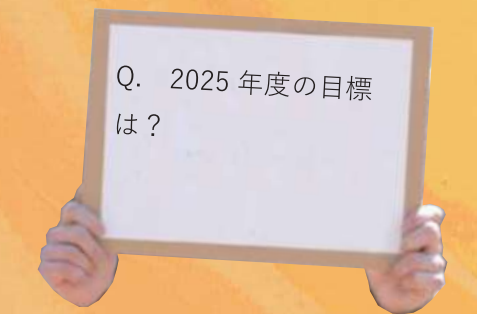
科目		(単位：円)
Ⅰ 資産の部		
1. 流動資産		64,668,453
2. 固定資産		16,976,566
資産合計		81,645,019
Ⅱ 負債の部		
1. 流動負債		15,676,311
2. 固定負債		17,185,000
負債合計		32,861,311
Ⅲ 正味財産の部		
正味財産 計		48,783,708
負債及び正味財産合計		81,645,019

2024 年度事業一覧

	事業名	対象	内容	日程・期間・回数	参加人数
事業	暮らしの学校いだらぼっち	全国の小中学生	山村留学事業	1年間	17
	夏の信州こども山賊キャンプ	全国の小中学生	夏休み期間に実施される3泊から9泊のこどもキャンプ	7/23～8/25 (全18組)	658
	冬の信州こども山賊キャンプ	全国の小中学生	冬休み期間に実施される3泊から4泊のこどもキャンプ	12/26～1/6 (全4組)	80
	夏の信州こども山賊キャンプボランティア	青年	山賊キャンプの相談員及び運営サポート	7/23～8/25 (全18組)	195
	冬の信州こども山賊キャンプボランティア	青年	山賊キャンプの相談員及び運営サポート	12/26～1/6 (全4組)	40
	長期インターンシップ（1年間の青少年育成プロジェクト）	大学生や専門学校生・社会人	グリーンウッドでの1年間のインターンシップ	1年間	1
	短期インターンシップ	大学生や専門学校生・社会人	グリーンウッドでのインターンシップ	3日から10日間	10
	大学との協働事業	松本大学 自然体験活動論	対象者理解	5/11	6
	大学との協働事業	岐阜聖徳学園大学 中島ゼミ	「生み出す暮らしから『学ぶ』を考える合宿」	2/12～14	7
	大学との協働事業	愛知教育大学	実習受け入れ	5日間	2
	山賊キャンプボランティア育成事業	山賊キャンプボランティア	研修やキャンプなどキャンプボランティアの育成	6企画	98
	一宮学園キャンプ	児童養護施設一宮学園小学生	一宮学園の児童を対象とした2泊3日のキャンプ	7/21～7/23	11
	サンカクシャキャンプ	NPOサンカクシャに関わる若者	1泊2日のキャンプ	6/25～6/26	18
地域	やすおか探検隊 あんじゃねっこ	泰阜村保育園年長児	やすおか村の自然を存分に楽しむ活動	全6回	11
	放課後児童クラブ いってきました	泰阜小学校の登録児童	放課後に行う村のこども向け学童事業	1年間	53
	あんじゃね学校	泰阜村の小学生	森遊び、天竜川ラフティングなど	全2回	43
	学習支援事業	泰阜中学校の登録生徒	週2回の学習支援の実施	1年間	15
	やすおか暮らしを楽しむ会 てまひま	村内の子育て世代	泰阜村の魅力を知る活動	全2回	85
講演・研修	学校法人常楽寺学園	学校法人常楽寺学園 保護者	どうやって育てる？大人になるまでに必要な力	1	90
	豊田市	豊田市こどもの居場所に関わる方	こどもが求める「居場所」X「居場所」にいる大人の役割	1	90
	NEAL講座	国立若狭湾青少年自然の家	「自然体験活動の特質」「自然体験活動の安全管理」	1	13
	長野県やまほいく研修	県内でやまほいくを実践する保育園	各園のオーダーを受けて提供	3園・1市	56
見学	グリーンウッド現地見学コース		基本の見学コース	5	33
	グリーンウッド現地見学コース		まるごと見学コース	6	26
大学授業	履修科目	立教大学	「自然と人間の共生」他	2コマ	311
		青森大学	「地域貢献演習」他	7コマ	150
	ゲストスピーク	日本女子大学	「社会福祉計画論」他	3回	210
		横浜国立大学	「教育課程論」	2回	220
		東洋大学	「教育課程論」	2回	140
		駒澤大学	「社会参加実習」	1回	20
		文教学院大学	「保育内容の指導法（環境）」	1回	85
		鹿児島大学	「自然学校へ行こう」	1回	250
		法政大学	「農山村とコミュニティ」他	1回	267
		茨城大学	「環境教育論」	1回	45
		松本大学	「自然体験活動論」	1回	6
		岐阜聖徳学園大学	「教育の社会制度論」	4回	200

2025 年度事業計画

	事業名	対象	内容	日程・期間・回数	参加人数
事業	暮らしの学校いだらぼっち	全国の小中学生	山村留学事業	1年間	17
	夏の信州こども山賊キャンプ	全国の小中学生	夏休み期間に実施される3泊から11泊のこどもキャンプ	7/23～8/24 (全21組)	760
	冬の信州こども山賊キャンプ	全国の小中学生	冬休み期間に実施される3泊から4泊のこどもキャンプ	12/26～1/6 (全4組)	110
	夏の信州こども山賊キャンプボランティア	青年	山賊キャンプの相談員及び運営サポート	7/23～8/24 (全21組)	200
	冬の信州こども山賊キャンプボランティア	青年	山賊キャンプの相談員及び運営サポート	12/26～1/6 (全4組)	40
	MFA（救急救命法）講座	青年（キャンプボランティア）	キャンプで使える救命法講座	7/7	12
	NEALリーダー養成講座	青年（キャンプボランティア）	自然体験活動指導者養成講座	9/21	15
	山賊キャンプ相談員向け企画	青年（キャンプボランティア）	山賊キャンプ相談員のスキルアップ活動など	全3回	55
	NPOインターンシップ	大学生や専門学校生・社会人	グリーンウッドでのインターンシップ	3～10日間	10
	大学との協働事業	関東学院大学	「自然と共に生きる暮らしのデザインを考える」	5/31～6/3	10
	大学との協働事業	岐阜聖徳学園大学 中島ゼミ	「生み出す暮らしから『学ぶ』を考える合宿」	2/12～14	10
	大学との協働事業	愛知教育大学	実習受け入れ	1週間以上	20
	サンカクシャキャンプ	NPO法人サンカクシャに関わる青年	1泊2日のキャンプ	6/19～6/20	20
地域	児童養護施設一宮学園キャンプ	児童養護施設一宮学園小学生	一宮学園の児童を対象とした2泊3日のキャンプ	8/22～24	15
	やすおか探検隊 あんじゃねっこ	泰阜村保育園年長児	泰阜保育園年長児にやすおか村の自然を存分に楽しむ活動	全6回	対象者 11名
	あんじゃね学校	泰阜村の小学生	森遊び、川遊び活動など	全3回	各回 20名
	放課後児童クラブ いってきました	泰阜小学校の登録児童	放課後に行う村のこども向け学童事業	1年間	登録者 63名
	学習支援事業	泰阜中学校の登録生徒	週2回の学習支援の実施	1年間	登録者 7名
	やすおか暮らしを楽しむ会 てまひま	村内の子育て世代	泰阜村の魅力を知る活動	全2回	50
	泰阜小学校 自然体験教室	泰阜小学校全校児童	川遊びを通して泰阜村を知る	1回	84
講演 研修	教育、地域作りなどのテーマ	行政、学校、企業、団体他		10	500
	ノウハウ提供研修	行政、学校、企業、団体他		5	50
見学	グリーンウッド現地見学コース	行政、学校、企業、団体他	基本の見学コース	1	40
	グリーンウッド現地見学コース	行政、学校、企業、団体他	丸ごと見学コース	1	30
大学授業	飯田短期大学		「ファーストエイド演習」他	15	10
	その他大学ゲストスピークなど		教育・環境教育・地域作り・福祉 などの分野	10大学20学部程度	800



伊那谷 ひと模様

泰阜村で1986(昭和61)年開設された山村留の共同生活施設「暮らしの学校」だ。今年度、この14年前に1年間過ごした山村留出身の岡田くみさん(24)が、職員として働き始めた。村での山村留生活が、初めは、岡田くみさんが、今度から、村を、支えながら、ともに成長していく。村を、支えながら、ともに成長していく。

山村留学 職員として「里帰り」



だいだらぼっちの敷地で摘んだモクレンの花を手に小学生と談笑する岡田さん(右)

暮らしの学校だいだらぼっちで今春から働く岡田くみさん(24)は泰阜村の人間として暮らしを受け止める。山村留出身の岡田くみさん(24)が、職員として働き始めた。村での山村留生活が、初めは、岡田くみさんが、今度から、村を、支えながら、ともに成長していく。村を、支えながら、ともに成長していく。

泰阜「山賊キャンプ」 泊まりがけで準備

有志16人 安全対策話し合いながら



泰阜産のキュウリなどをかじりながら話し合うボランティアら

泰阜村のNPO法人「グリーンウッド」が、今年度初の山村留「山賊キャンプ」の準備を進めている。本番に向け、山村留出身の有志16人が泊まりがけで準備を進めている。本番に向け、山村留出身の有志16人が泊まりがけで準備を進めている。



泰阜村の川で遊ぶ泰阜の児童とボランティアの子どもたち

泰阜村のNPO法人「グリーンウッド」が、今年度初の山村留「山賊キャンプ」の準備を進めている。本番に向け、山村留出身の有志16人が泊まりがけで準備を進めている。

千葉の児童養護施設小中学生 自分たちで遊び決め 食事作りも挑戦

泰阜キャンプ 大人に頼らず

一宮学園の職員が、毎年夏と冬に同法人が運営する山村留「山賊キャンプ」に参加している。今年度は、山村留出身の有志16人が泊まりがけで準備を進めている。本番に向け、山村留出身の有志16人が泊まりがけで準備を進めている。

年末年始の伝統学ぶ

泰阜村 お年取り汁などの調理を体験



だて湯きを作る児童

泰阜村の平田田舎で、お年取り汁などの調理を体験している。山村留出身の有志16人が泊まりがけで準備を進めている。本番に向け、山村留出身の有志16人が泊まりがけで準備を進めている。



生活共にし教育理念学ぶ

山村留学 教員志望の大学生がインターン



山村留学の子どもたちと生活する高砂さん

泰阜村の山村留「山賊キャンプ」に参加している。山村留出身の有志16人が泊まりがけで準備を進めている。本番に向け、山村留出身の有志16人が泊まりがけで準備を進めている。